

第二十章 最後の対決

1

降下し続けるエレベータ。

萌黄は張りつめた空気に息苦しさを覚えた。目の前で背中を向けているのは、先ほど萌黄に対してわずかに頬を緩めた三十代半ばの背広の男だ。髪を七三にきっちり分け、中肉中背の体型はいかにも働き盛りのサラリーマンといったところだ。萌黄は誠実そうな彼の雰囲気に関心を持っていた。息苦しさを解消するため彼女は思い切つて背中に問いかけてみた。

「あなたがたは真佐吉さんとどんな関係なんですか？」

しかし背広の男はわずかに身じろぎしただけで、返事はしなかった。左右に並んだふたりの男——Tシャツ&ジーンズの二十代の男と、体育教師風で四十代の上下ともジャージの男——も同じで、彼らの表情からは何も読み取ることができなかった。

（そっちがその気なら——）

萌黄は心の中で風船をイメージした。たちまち男たちの靴底が床から浮かび上がった。

「うわっ」「おわわっ」

男たちはあられもなく両手をバタつかせた。それでも身体のバランスは思うようにとれず、額を壁にぶつけたり、振り回した拳が仲間のアゴに入ったりした。

その時、萌黄は彼らの耳にイアホンが差し込まれているのに気がついた。コードがないため補聴器にも見えないが、三人が三人とも難聴とは思えない。

チン。

エレベーターは止まり、扉が左右に開いた。

「あの、降りればいいんですよね」

萌黄が訊ねると、背広の男はズレた眼鏡をかけ直し、はずんだ息のまま、二度頷いた。

出たところはちよつとしたロビーになっていた。床はホテルのようなカーペットが敷き詰められ、天井には小ぶりのシャンデリアが吊り下げられている。

さらにロビーの奥に目を移すと、廊下が左右に伸びており、こちらから見える側に幅広の扉が並んでいた。まるで広い映画館かコンサートホールのようなのだ。

「ついてきてください」

ネクタイの曲がり具合を正した背広の男は、再び背中を向けて幅広扉へと向かった。萌黄も後に従う。Tシャツとジャージも続く。

背広の男が扉を押した。途端に反響する群衆のざわめ

きが萌黄の耳を奪った。入った場所は暗い通路の末端で、一本の道が明るいほうへと続いている。声はそちらから響いてくる。

（人がいっぱいおるみたい）

後ろで扉が閉じられた。三人の男は通路を前へと進む。萌黄も連行されるように歩いていく。

通路の半ばまで来た時、萌黄はこの空間が何であるのかを、驚きをもって悟った。

反響するのも道理である。そこはすり鉢状の円形劇場になっていたので。古代ローマの遺跡にあるような、かなり本格的なものだ。見た限りではどうやら本物の石材が使われているらしい。

さらに驚いたことに、舞台を囲んだ客席には数百人も男たちがひしめいていた。ざわめきの正体は彼らだったのだ。

萌黄たちの姿が通路に見えた途端、場内は水を打ったように静まり返った。それがあまりに見事だったので、萌黄は誰かが指示を出しているではと思ったほどだ。しかしテレビスタジオのADのような人間は発見できなかった。

「あちらにお座りを」

背広の男は、劇場の中央に置かれた椅子を示した。萌黄は言われるままに演台に登り、おずおずと椅子に近づ

いた。

数百人の男たちの視線が萌黄に集中した。彼らが一斉に息を飲むのが判った。

これでは見せ物だ。萌黄は究極の居心地の悪さに、椅子にかけるどころではなかった。振り返ると、背広の男たちはそこが自分たちの所定の位置らしく、客席の最下段に収まっていた。

男たちは隣同士で話をするでもなく、ただ座ったまま、じろじろと萌黄を注視している。

萌黄は泣きたくなつた。視線の重圧に押しつぶされそうだった。まさかここで歌を歌えというのではあるまい。芸を見せろと言われたら舌を噛み切つて死んでしまうかもしれない。

どれぐらい時間が過ぎたか。実際はほんの数秒だっただろう。

前触れもなく、場内の明かりが消えた。何人かがオツと声を発した。しかし真つ暗になつたわけではない。スポットライトがひとつ、天井から萌黄に向かって浴びせかけられていた。

萌黄は椅子の背もたれに乗せていた手を額の上にかざし、その強烈な光を遮った。

すると、頭の上から『声』が降ってきた。

《萌黄さん、お待たせした》

それは真佐吉の声に他ならなかった。

《こんな場所にお呼びだてして申し訳ない。いろんなことを一度に説明するには都合が良くてね》

声の方向は特定できない。いずれにせよまたマイク越しの声だ。そんな萌黄の不満を読んだかのように、

《済まないな。命を狙われている悲しさ、ナマの姿をおいそれと晒すわけにはいかないのだよ。判ってくれたまえ》

「前置きはいいりません」萌黄はたまらず叫んでいた。

「わたしをどないするつもり？」

《決まってるじゃないか。君はリアルだ。わたしの野望を実現するための尊い人柱になってもらうんだよ。すでにお仲間が、君より先に到着しているぞ》

壁の一角に灯がともった。新たな光は壁までも劇場の様式に合わせて石積みであることを萌黄に教えた。

しかしいま肝心なのは壁ではない。

光は、空中に太い鎖で吊り下げられた二個のカプセルを照らしていた。そのカプセルの中には人の姿があった。

「清香さん！ 齋藤さん！」

2

モーターの作動音と共に、天井に吊り下がったふたつ

のカプセルが下降してきた。

中にいるふたりはピクリとも動かない。その理由はカプセルが目の高さまで降りてきた時に判った。清香も齋藤も死んだように目を閉じている。棺桶を連想させるカプセルの形が萌黄の心をいやが上にも波立たせた。

「生きてるの？」

訊ねるともなく口にした言葉に真佐吉は答えた。

《当然だ。死なれては元も子もない》

カプセルの中で清香の胸はゆるやかに上下していた。齋藤も同じで、八十歳のご老体はまるで生き仏といった感があった。

真佐吉は続ける。

《そのふたりは水の中から侵入してきた。WIBAには将来的に水中遊覧バスの就航を想定した発着場があるのだが、その出入口にある巨大な扉をリアルパワーで押し上げて入ってきたよ。まさかそんな潜入方法があるうとは、この私でさえ想像していなかった》真佐吉の口調は楽しげに弾んで聞こえる。《君たちはわずかな期間でリアル能力を理解し、磨きをかけ、さらには工夫を凝らしたようだな。ハッハッハ、そうでなくては迎え撃つ我々としても闘い甲斐がないというものだ》

「我々？ ここにいる人たちは、やっぱりあなたの軍隊なんやね」

《いやいや、そうではない》

また照明がともった。数百人の男たちが再び姿を現した。

《彼らは皆、私の協力者なのだ。彼らなくしては、計画をここまで推し進めることは不可能だった》

真佐吉に協力？ この世界を粉々にしようという計画に？

萌黄はキツと天井を見据えた。そして決意を秘めた面持ちでカプセルのそばを離れると、おもむろに演台を降りた。萌黄の前に、自分をここまで連れてきた背広の男がいた。男の目が驚き、怯えの色が一瞬かすめた。

「あなたのお名前は？」

問われて男は顔を背けた。その耳に補聴器状のイヤホンが見える。萌黄の手がスツと伸びた。

「あわわっ、ちよつとキミ！」

男は立ち上がった萌黄に手を伸ばした。萌黄はそれと交わして二歩ばかり後ろに下がる。その手に男の耳から抜き取られたイヤホンがあった。

「わたしは〈キミ〉と違う。^{ちや}光嶋萌黄という名前があります。——で、あなたは？」

男はリアルには敵わないと知ってか、追いかけることをあきらめ、がつくりと肩を落とした。

《構わんよ。名前くらい教えてあげたまえ》

まるで部屋自体がしゃべっているような、よく通る声で真佐吉は言った。するとそれが許可を得たことになったのだろう。男はようやく自分の名前を口にした。

「萩矢……渉わたるです」

萌黄はチラツツと天井を流し見て頷いた。

(睨にらんだとおりや。これは補聴器なんかやなくて、真佐吉の個別指令を受け取るためのレシーバーなんや)

「こんにちは、萩矢さん。——そろそろ、こんばんは、かな」

萌黄は緊張を相手に知られないよう、声に余裕を見せて話しかけた。なにしろ周囲には数百人の男たちである。真佐吉の指令ひとつで彼らがどう行動するのか、判ったものではない。

「萩矢さんはここではどんなお仕事を？」

「私は」チラチラと天井を仰ぎながら、「真佐吉さんのお手伝いを——」

「真佐吉さんの計画って？」

「——その——細菌兵器を持ってこの国に侵入したテロリストどもを排除することです——」

(細菌兵器!? テロリスト!?)

萌黄は驚いて二の句が継げなかった。ずいぶんと古い話ではないか。一週間は昔の〈噂〉である。笹倉長官のテレビ発言以降、テロリストの話など誰も取り上げなく

なって、すっかり下火になったと思っていたが。

「テロリストは、どこから来た人間？」

「——判りません」

「判らないって……相手の素性も知らないで闘おうって
いうの？」

「いえ——特徴ぐらいなら把握しています」

急に萩矢の顔に生气が戻った。まるで忘れていた使命を思い出した兵士のように。そして決然たる表情を浮かべて萌黄に告げた。

「テロリストのコードネームはヘリアル。その特徴は、銃弾を跳ね返す、怪我を負ってもまたたく間に癒える。

超能力を身につけており、手を触れずに物を動かすことができる。つまり——あなたのような人間です」

そう言った萩矢の指が萌黄を指した。

「いや、人間じゃない。あなたは我々人間とは違う。平和を脅かすテロリストだ！ いや、怪物だ！」

その言葉に勢いを得たのか、客席にじっと座っていた男たちが一様に騒ぎ出した。誰もが萩矢に声援を送り、萌黄に対して非難と怒りの入り混じったブーイングを飛ばした。

「リアルは消えてなくなれ！」

「テロリストの野望を阻止すべし！」

「平和な日々を我々に返せ！」

男たちは立ち上がった。今にも雪崩を打って萌黄に襲いかからんばかりに興奮している。

萌黄は身の危険を感じて後ずさりした。演台に目を転じると、ふたつのカプセルは混乱を避けるように上昇を始めている。

萌黄は唯一の逃げ場である演台に上がり、椅子のそばへと戻った。しかし場内の騒ぎは一向に収まらない。何人かは演台の端にかじりついて、隙あらば飛びかかろうという体勢をとっている。それでも萌黄が顔を向けると、まるで牙を剥いた猛獣に吠えかかられたように、身体を後ろに反らして逃げようとする。

リアル有能力、いや脅威については十分に刷り込まれているようだ。それでも頭の中には古い情報しかない彼らは、一体どうしてここにいるのか。

そう考えた時、萌黄はようやく解答に行き着いた。

（この人らは、ヴァーチャル世界ができた早いうちに、いやその前からかもしれない、真佐吉さんによつてここに呼び寄せられた人たちなんや。そやからその後の新情報を入る手段もなく、真佐吉さんの言うがままに操られてるんや）

となると、興奮している彼らを説得し、自分に対する敵意を解消するなど、望み薄だ。

萌黄はどうしようかと思ひ惑った。そこに油断が生じ

た。いつの間に用意したのか、萌黄の足に縄がかけられた。彼女は受け身も取れずに、演壇の真ん中に引き倒された。

3

いざとなればリアルパワーで対抗すればいい。そんな考えが萌黄の気構えを甘くしていたきらいがあった。

縄で引つ張られ、倒れた拍子に後頭部を痛打した時、萌黄は自分が異様な雰囲気に吞のまれていることを思い知らされた。背中を庇うはずだったエアクションが、ほとんど発生しなかったからだ。

(うまくイメージでけへん)

男たちの勢いはさらに増し、声はわんわんと劇場に飢こだましている。萌黄の転倒に「リアル、恐れるに足らず」と氣勢を上げる男もいる。円形劇場は今や円形闘技場と化していた。

視界の中で男たちの顔がぐるぐると回り出した。しばらく忘れていた自律神経失調症の症状がぶり返してきたのかと萌黄は焦った。

その時、指先に硬い物に当たった。椅子だ。

萌黄は薄目を閉じて「集中、集中」と念仏のように唱え、椅子の足を握ると、その手にリアルパワーを込めた。

「おおっ!？」

数百の男たちの目が、演台から浮き上がった椅子に釘付けになった。椅子は萌黄の手を離れて上昇していく。

「魔法だ……」

誰かがつぶやいた。椅子の頼りなさげな浮きかたが、その言葉に真実味を与えた。

恐怖は簡単に伝染する。場内の熱気は幾分沈静化した。萌黄は床に大の字になったまま、首だけを起こした。

縄をつかんでいるのは体育教師風の男だ。萌黄は彼とのあいだの距離を目測した。

ドンッ。

高々と上がった椅子は体育教師の面前に落下し、粉々に砕けた木片を避けようとして彼は手を放した。

萌黄はその期を逃さず右膝を引き、足首から縄をはずした。男たちは虚をつかれたように押し黙ったままだ。

《アッハッハッハ、やはり私の目に狂いはなかった》

真佐吉の楽しげな声が朗々と響き渡る。

萌黄はいらだちを募らせた。これでは高みの見物を決め込んだ真佐吉を前に、御前試合を勤めているようなものじゃないか。

《おかげで皆に、リアルとはどういうものか、ナマで見てもらうことができたよ。先のふたりを捕まえた時は、ふたりともすぐ罨に落ちて気を失ったんで、がっかりし

ていたところだ。これで皆にも、リアルの存在が実感できたのではないかな》

男たちの頭が頷いた。萌黄の目にはそれさえ真佐吉に強制されているように映った。彼らは真佐吉に作られた機械の歯車に過ぎないのだ。

（ひよつとして——この人たちも真佐吉さんに弱みを握られているんやろか……。弱みをネタに強請ゆすられて集まったんやとすれば納得がいく）

そこを突いてやろうかと口を開けた時、真佐吉の号令が男たちに下された。

《シヨ―は終わりだ。皆さん、彼女をカプセルに押し込めてくれたまえ》

言い終わるや、頭上から空っぽのカプセルがスルスルと降りてきた。

カプセルに放り込まれて意識をなくせば、永遠に反撃の機会を失ってしまう。何としても逃げおおせなければ。男たちが一斉に起立した。彼らはそのままじわじわと萌黄のほうに迫ってきた。

男たちは武器らしいものを持っていない。素手で捕えるつもりらしい。萌黄は困惑した。リアルパワーを直接彼らに向けた場合、ヴァーチャルである彼らに大きな打撃を与えて、命を奪うようなことになりかねない。大学の時の悲惨な光景は繰り返したくなかった。

「来ないで！」

言つてはみたが彼らに聞く耳はない。すでに最前列は演台に登り始めている。

萌黄は深く息を吸った。逃げ道は決まった。今度こそ集中力を高める必要がある。

(よしっ！)

萌黄は短い助走をつけると、両足を揃えて床を蹴った。

「おあっ、スゲッ！」

「やっぱ人間業じゃねー」

萌黄の身体は男たちの頭上を滑空し、目で追いかけた数人が仰向けに倒れた。

萌黄はTシャツをなびかせて座席の切れ目に着地すると、男たちは後ろに取り残される形になった。

そのまま出口を突っ切ろうと駆け出した瞬間、

「うっ」

萌黄の足に急ブレーキがかかった。

あったはずの出口がなかった。立ち塞がったのは、レング造りの壁だ。

(これもホログラフィ映像か)

振り向くと、男たちも堪忍袋の緒が切れたのだろう、今度は全速力で走ってくる。逡巡しゆんしゆんしている暇はない。

萌黄は見当をつけて壁を叩いてみた。思ったとおり手が立体映像の壁を突き抜ける。押すとガチャガチャ

と動く気配。だがそれ以上押しても扉は開く気配がない。ロックされてしまったらしい。

「待たんかい！」

先頭集団がすぐそこに来ていた。萌黄は「ごめん」と一声叫ぶと、振り向きざまにエア爆弾を投げつけた。その風に十数人が吹き飛ばされ、気圧の変化に萌黄の耳がキーンとすぼまった。

再び壁に立ち向かおうとした萌黄の視界の隅に、キラツと光るものが映った。清香の入れられたカプセルである。場内に置いておいては危険と真佐吉が判断したのだろう、天井に近い四角い穴から引き込もうとしている最中だった。

反射的に萌黄は跳躍した。決して大きくないその穴から逃げることを思いついたのだ。

目測は誤らず、両手はカプセルを吊るした鎖をつかんだ。萌黄の目の前で、眠ったままの清香の顔が揺れる。目覚めてくれることを期待したが、願いはかなえられなかった。

萌黄は滑りそうになりながら、カプセルの上に這い上がろうと懸命に鎖をよじ登った。こんな不安定な場所ではリアルパワーの焦点も合わせにくい。いざという時に頼りになるのはやはり基礎体力だ。その基礎体力に自信がないのが萌黄だ。

(こんなことなら部活でもやっていたら)

思わず苦笑が漏れた。

と、突然、カプセルの動きが止まった。前方を見ると、四角い穴にシャツターが下りようとしている。

「もうっ、次から次へと！」

カプセルと穴とのあいだはまだ数メートルの開きがある。

萌黄は自分に乗せて飛ぶ雲をイメージすると、鎖から手を放した。身体はいったん空中を沈んだが、すぐに弧を描いて上昇し、間一髪で閉まりかけた穴に滑り込んだ。

4

萌黄は暗い開口部に飛び込んだのは、ほとんど賭けだった。真佐吉の支配する地下都市だ。そこに何が待ち受けているか知れたものじゃない。萌黄はエアクッションを身体の下に発生させて受け身を取ったが、ドスンと弾む感触がすぐに返ってきた。エアクッションが摩擦で小さな火花を散らす。

わずかに床をこする音がすると、萌黄の頭は壁の数センチ手前で停止した。

そこは狭い部屋だった。といっても今までいた空間に比較してのことで、実際には学校の教室一個分の広さは

あつた。

天井の蛍光灯はぼんやりとじていて、萌黄は目が慣れるのにしばらく待たねばならなかった。

部屋の空気は生暖かく、わずかに湿度が含まれている。目を凝らすと、いくつかの長細い台があり、その上に清香たちを封じ込めていたのと同じ透明ケースが載っている。数えるとその数は十。清香と齋藤を入れれば十二である。真佐吉は、すべてのリアルをここでケースに収納するつもりなのだろう。

物音がした。衣擦れのようなかすかな音だった。

萌黄の飛び込んできた四角い穴は、シャッターが閉じた時から一切の音を遮断していた。だから劇場の音ではない。

誰かが隠れているのか？ 台の陰に腰をかがめ、音のしたほうを見ると、中ほどに台のケースの中で、黒い塊がうごめくのが見えた。

「誰？」

萌黄は思い切って声をかけた。

「——ああ——助けてくれ——動けない」

かすれた男の声が答えた。萌黄はハアとため息をつくと、ゆっくり腰を上げた。

「柊さん」

「——萌黄さんか——俺はどうなっちゃったんだ？」

萌黄は柗の横に立った。

柗は長身の背丈にぴったり合った透明ケースの中から萌黄を見上げていた。口許はだらしなく開き、その目からは傲岸不遜な光は消えていた。

「——ここは——どこだ」

「WIBAの地下よ」

「真佐吉のヤツ——」柗は起き上がろうとしたが、身体に力が入らないようだ。「ダメだ、動けない」

「自業自得や」

萌黄は多少哀れみを覚えながらも、そう言わずにはいられなかった。

「ヒドいな」柗は息も絶え絶えである。「俺には元の世界に戻っても——待つてる人間はひとりもない——それならこの世界で生き残る道を探したって——構わないだろう？」

「他人を巻き込んでいいわけないでしょうが」

「——しかたないことだ——誰にも迷惑をかけない人生なんて——そんなもの有りはしないさ」

頭上で機械の動作音がした。ハツとして見上げると、ケースと同じ長さの透明な蓋が、柗の上に降りてこようとしていた。頭の部分に白いホースが付いている。清香たちのようにケースを密閉した後、催眠ガスを浴びせようというのだ。

「いやだ——助けってくれ、萌黄さん——このままじゃ真佐吉が喜ぶだけだぞ」

「身勝手な人！」

萌黄はケースのそばを離れた。柘は目だけで彼女を追う。

「——こんなので終わる人生なんてイヤだ——チャンス
をくれ！」

降り切った蓋はケースの上面にガチャリとはまった——
——と思った時、室内の空気が嵐のように荒々しく対流し、
蓋がホースを千切って壁際まで吹き飛んだ。

風は他のケースや装置などを巻き込んで、それらを
ひっくり返し、破壊した。

やがて騒音は収まった。柘がそつと瞼を開けると、自
分を見おろしている萌黄の顔があった。

「わたしはアンタと組むつもりはない。真佐吉さんを許
すつもりもない。それだけ」

言い終えた萌黄は耳をそばだてた。萌黄が入ってきた
四角い穴の反対側に扉がひとつあり、その向こうで男た
ちの近づく声がした。追っ手だ。

萌黄は部屋の中を見回し、奥に観音開きの扉があるの
に気がついた。彼女は柘に最後の一瞥をくれると、急ぎ
そちらに向かった。

忙しい忙しいと何度もこぼしながら、野宮助教は機械のセッティングに余念がなかった。彼が設計し、今朝がた完成したばかりの〈無指向性プラズマ放射装置〉。仕組みは小田切ハジメを無力化した時に使用した兵器と同じだが、威力は数十倍強力になっている。

野宮は、真崎隊長代理から借り受けた装甲車にこの装置を搭載すると、前後を武装したジープに守られて、ここWIBAへと勇んで乗り込んできた。

「運転手クン、しっかり頼むぞ」
「ハイッ」

ハンドルを握るのは二十歳にも満たないリアルキラーズ隊員だ。聞けば昨日入隊したばかりだという。

真崎は『人員不足で追加募集したら、役に立ちそうにない、青いのばかり集まってきやがった』と嘆いていた。お互い、部下には恵まれないなど、助教授は夕焼けに向かってため息をついた。

（山上も山中も山下も当てにはならんし、有能な和久井クンは失踪——。さりとて高齢の筵瀉^{むしろがた}教授に手伝わせるわけにもイカンしな）

野宮は視線を目の前の機械に移した。燦然と輝くプラズマ放射装置は一抱えもある壺のような形をしていた。

設計した野宮は、装置の開発をひと月前から進めており、ヴァーチャル世界の誕生後は昼夜を問わずに完成を

急がせ、ついに今日、日の目を見たのである。

「作動させれば、リアルは瞬時にして抵抗する力を失い、立っていることすらできなくなる。もちろん、伊里江真佐吉も含めてな。そうなれば後は子供にだって逮捕できるといいうわけだ。ウハハ、今夜は久しぶりにうまいガムが噛めそうだわい」

「良かったですネ、先生」

運転手の少年が素直に相づちを打った。

装甲車はセントラルタワーに近づきつつある。

「このタワーを抜けた所まで行ってもらおうか」

「了解です、先生」

その時、バックミラーに駆け寄ってくる迷彩服の姿が映った。

男は走っている装甲車の助手席側の扉を開けて、強引に乗り込んできた。

「先輩、どうかしましたか？」

少年が訊ねると、男は愛想笑いを浮かべて、

「いや、俺も護衛に付けと叔父貴に言われてな」

「伯父さん——ですか」

「隊長代理だよ」

「真崎さん!?——カッコイイ」

「そんなわけで」と言って、男は笑顔を野宮に向けた。

「よろしく。利根崎です」

「ああ、いや、こちらこそ——」

言い終わらないうちに、パンツと乾いた音がした。

野宮は額に熱い痛みを感じた。

目の前を赤いしぶきが飛び散った。

(何だ、これは？　もしかして血か？)

野宮の思考は、そこで途切れた。

目の前が急速に暗くなり、すぐに何も見えなくなった。

「ど、どーゆーことだよおー。話が違うじゃねーか！」

利根崎は頭を抱えて喚いた。プラズマ放射装置にもたれて絶命している野宮助教授の頭部は、すでに砂状化が始まっていた。

「コイツはリアルじゃなかったのかよおー！　俺はそう信じてたから、わざわざ油断させて撃つたんだよお！

クソツ、柊のヤロー、だましやがったな！」

装甲車は走り続けている。運転手の少年は恐怖のあまり、ブレーキをかけることさえできないでいた。

「最後のチャンスだって念を押されたのに、俺、今度こそ叔父貴に殺されちまう——。オイ、少年！」

運転手の少年は身体をビクツと震わせた。

「車を停めるな。停めたら撃つ。それがいやなら走り続けるんだ！」

装甲車の前を先行していたジープは、所定の位置であ

るタワー下に到着すると予定どおり停止した。しかし装甲車はスピードを落とさず、そのままジープに突進すると、人員を乗せたままの車体を跳ね飛ばした。

後ろから付いてきたジープの隊員が真崎に緊急連絡を入れた時には、装甲車の姿はもはや遙か先だった。

「こうなったら——死んで詫びるしかねえ！」

利根崎は少年に銃を突きつけ、装甲車を暴走させた。

装甲車は一路、WIBAの端に向かって突進した。

波除の堤防を越えた時、利根崎は真佐吉の笑い声を聞いたような気がした。

次の瞬間、琵琶湖の水は、少年と利根崎と、そして半ば砂と化した野宮助教授の亡骸を飲み込んでいた。

5

「あのバカタレがっ」

真崎はテーブルの上の書類やパソコンをはじき飛ばした。作戦室にいた若い隊員たちは一斉に押し黙り、おびえた目を自分たちのリーダーに向けた。

「勝手に暴走しおって……。終いには自分で自分の首を絞めたか——」

真崎は椅子にどさりと腰を落とし、頭を抱えてうなだれた。そんな上司を前にして、報告したシユウも言葉を

失っていた。

真崎の甥である利根崎が、あろうことか野宮助教授を銃殺し、プラズマ放射装置を積んだ装甲車ごと琵琶湖に飛び込んだのだ。

今回の作戦には、真佐吉の妨害を警戒して路上には隊員たちを各所に配置し、万全の態勢で望んでいた。だがこのような形で内部、いや内輪から計画が瓦解するとは誰も予想だにしていなかった。

一連の顛末については、車載カメラとマイクによってその一部始終を知ることができた。

「俺の監督不行き届きだ」真崎は両手に顔を埋めながらうめくように言った。「いやそもそも、奴を引き入れたのが間違いだった」

真崎は午後、外務官僚に呼ばれて米軍への状況報告のため名古屋まで出かけていて、現場にはいなかった。

「隊長代理は忙しすぎたのです。個々の隊員にかまっている暇などなかったはずです」

シュウは慰めの言葉を口にしたが、真崎に通用しないことは誰よりもシュウ自身が知っていた。

「装置を乗せた装甲車ですが、引き揚げは不可能だそうです。現在、遺体を收容すべく潜水隊を編制し——」

「無駄だっ」野崎は吐き捨てた。「残り時間は限られている。よけいなことに人員を割いている暇はない」

「はっ」

その通りである。今は全てにおいてギリギリの状態だ。

「W I B Aの地下攻略はどうなっている？」

シユウは安堵した。いつもの隊長代理が戻ってきた。

「予定どおり地下一階から順次包囲を狭めながら、部隊を階下へと進ませています。ご存知のようにW I B Aには八方向に大階段がありますが、北階段——現在のW I B Aの停泊状態から便宜的に命名したのですが——そこから進んだ班が、つい十分前、地下二階に降りたのが最前線です」

シユウは机の上に立体地図を投影させた。W I B Aは水面上のビル群と釣り合いをとるため、水面下にも相当な構造物を擁している。それらを一階ごとに点検しているのだ。時間や人数がいくらあっても足りない。

「地上は完全に掌握しました。各施設を管理するP A Iをリセットし、我々の上位P A Iの管理下に置きました。地下も1ブロックごとにネットワークからの遮断を実行しています」

「すべての大元は地下五階にあるんだったな」

「そうです。今のペースが維持できれば明日の午後にはたどりつけるかと」

「急がせる。真佐吉は必ず地下のどこかにいる」

シユウは作戦室を振り返った。隊員たちは隊長代理が

いつもの彼に戻ったと知り、それぞれの任務遂行に没頭していた。

「しかし、隊長代理」シユウは幾分声をひそめた。「隊員たちの中には、我々をここにおびき寄せたこと自体、真佐吉の罠ではないかと疑っている者がいます」

「バカな。タイムリミットが迫った今、リアルたちを呼び集めた本人が、この時期、いなくてどうする？」

「数百人の謎の男たちも気になります。いまだその所在はつかめていませんが」

「調査結果は読んだ。そいつらは一般人の有象無象うぞうむぞうだろう。話にならない。たとえ武器を持って待ち構えていたとしても、地下に向かっているのは我が選り抜きの精鋭部隊だ。敵ではない」

「ただ、相手が相手だけに」

「策士の真佐吉といっても限界はある。無用な取り越し苦労をするな」

真崎は机を離れ、窓に顔を寄せた。

この作戦室はW I B Aの最も陸地寄りに立つ建物の一階が当てられている。外は夕焼けが消えようとしており、今朝から広がり始めた黒い雲が空の半分を占領している。その下を数隻の大型ボートが水上を滑っていく。真佐吉やリアルリアルの逃亡を防ぐ目的で空中と水中の両方にセンサーを配置しているのだ。反応すれば直ちに武装したへ

りや水上バイク、潜航艇が発進することになっている。

「光嶋萌黄は、エレベーターで地下に降りたのだな？」

「そうです。……利根崎の報告では、突然現れた複数の男に拉致されたと」

真崎は背中で頷いた。

沈黙の間があり、シュウは訊ねずにいられなかった。

「米軍は何と言っていましたか？」

真崎はその質問を予期していたのだろう。胸の前で腕を組むと、

「あさって、つまりタイムリミットである十四日目の前日正午までに決着がつかない場合は、最後の手段をとると通告してきた」

「つまりそれは——」

「核ミサイルをここに落とすということだ」

シュウは胃の中に、鉛の塊を放り込まれたような気分になった。

野宮助教授の装置が作動していれば、真佐吉は捕われて今頃は勝利の美酒に酔いしれていられたも知れない。

真崎はそれほど当てにはしていなかったようだが。

状況は好転しないまま、いよいよ崖っぷちを迎えようとしている。これからはひとつの作戦ミスが命取りになるだろう。シュウは身震いを禁じ得なかった。

「勝つしかない」

窓を離れた真崎はシュウの肩に手を置き、その指に力を込めた。

「アメリカに残してきた嫁さんと子供のためにもな」

シュウは拳を握りしめると、小さな声で「はい」と答えた。と同時に意外な思いに打たれていた。真崎が命令以外の私的な会話の中で、誰かの〈家族関係〉に触れたことなど、かつて一度もなかったからだ。

6

夜の闇が濃さを増しつつある。

セントラルタワーから三ブロックほど南にある小さな公園。いま一台のジープがその横を走り抜けていった。

そのテールランプをじっと見つめる二組の目が、入口脇の公園管理所の中にあった。

「行ったみたいですね」

小さいほうの影、和久井助手がささやくと、

「これはまだまだ使えるな」

と大きな影、久保田がつぶやいた。彼はパソコンの画面を覗き込んでいた。萌黄が連れ去られた時の彼女の置き土産だ。画面には以前と同じように、迷彩服たちの位置がWIBA地図上にしっかりプロットされている。今しがた通り過ぎたジープに乗っている隊員の数まできつち

りと示していた。

室内の机の引き出しに誰かが買い置きしたカップラーメンが入っていたので、久保田と和久井は生のままポリポリとかじった。巨体の久保田の空腹を満たすには到底足りなかったが。

（おかげでズボンが楽々入っちまった）

久保田は上下ともすっぽりと迷彩服を着込んでいる。

利根崎が連れてきた子分格のふたりから奪い取ったものだ。体格の大きいほうを久保田が、もう一方を和久井が身につけた。それでも久保田の着た迷彩服は丈が合わず、いささか不恰好だったが、和久井は器用に迷彩服を着こなした。おかつぱ頭に帽子を乗せた姿は、遠目に見ればいっぱしの隊員に見えるに違いない。

（アイツ——利根崎はどうしたろうか）

気絶したものと思いついで床に放り出しておいたのが、外から装甲車の音が近づいてくるとむっくりと起き上がり、「ちくしょー」と一声叫んで駆け出していった。

仲間を引き連れて戻ってくることを恐れた久保田は、すでに身ぐるみ剥いでいたふたりの子分を空き部屋の一室に閉じ込めると、萌黄のリュックを肩にかけ、和久井を連れて別の入口から百貨店を脱出した。

無人街をわずかな路地伝いに逃げ、この管理所に落ち着いてからパソコンでチェックすると、驚いたことに利

根崎は死亡者リストに入れられていた。なぜか理由は空欄のままだった。

(敵さんにもいろいろあるようだな。さて俺たちはこれからどう動けばいいのやら)

至るところでリアルキラーズの目が光っているため、身を隠すだけで精一杯だ。

萌黄と約束したように、囚われの身となったむんを助け出してやりたい。そう思って、利根崎の子分を締め上げたところ、むんたちがいるのはWIBAの外だと白状した。とても救助に向かうどころではない。

気温が下がってきた。

足の裏から冷気が上がってくる。

(ウウツ……こんな時に)

久保田は小用を催した。

ガラス窓から覗くと、目と鼻の先に公衆トイレがあった。お洒落な外観はさすがにWIBAである。

(レディーの前だ。部屋の隅っこで立ちションというわけにもいかんからな)

久保田は和久井に断って管理室を出た。

月は黒い雲に隠れている。にもかかわらず公園は真新しい街灯に照らされ、昼間のように明るかった。

久保田はためらった。しかし尿意は限界に近づいている。彼は意を決して管理室を離れた。その途端、ヤバい

という思いがさらに膨れ上がった。彼の影が何倍にも伸びて、公園の上を踊ったからだ。

「ええいつ、今さら戻れん」

久保田は足を進めた。影はまるで地面を吐くように踊り狂っている。

急げ急げ。あと数歩でトイレに到着だ。そう思った時。チュウウウン。

銃声が空気を切り裂き、ふくらはぎに激痛が走った。

「あがっ」

久保田は両手をついて地面に倒れた。ジーンズの破れ目から赤い砂がこぼれ落ちる。

勝ち誇ったような忍び笑いが流れてきた。

(迷彩服の奴ら、油断させておいて戻ってきたのか!?)

自分の迂闊さを叱り飛ばしながら、久保田は公園の入口に目を向けた。しかし笑いに続く声は意外にも反対側、公園の中から聞こえてきた。

トイレの斜め向こうに、地下の熱を逃がすための排気筒がある。その前でひとりの男が銃を構えていた。木の陰になっていて正体がかめれない。睨んでいると、さらにふたりの男が排気筒から現れた。

先頭の男が口を開いた。

「リアルキラーズがたったひとり、こんなところで何をしている？ この長野防衛隊が調べてやろう」

(長野防衛隊だと?)

やがて明かりの下に、ふてぶてしい姿が現れた。迷彩服ではない。三人はまちまちの服装で年齢は二十歳前後か。

久保田は四つん這いのまま腰を引いて身構えた。ふくらはぎが焼きごてを押されたようにズキズキと痛む。

「おっさん、ここで何をしていた？」

先ほどの声が訊ねた。

「街中のパトロールだ。お前たちは誰だ」

声はそれには答えず、質問を重ねてきた。

「どうしてひとりなんだ？」

「みんな忙しいからな」

久保田はそつのない様子で答えたが、男は仲間を振り返り、アゴで管理室を指しながら何ごとか耳打ちした。

久保田は反射的に管理室の受付窓を見た。窓の中は真っ暗だった。

「お友達がいるんだね」

しまったと舌打ちしたが後の祭りだった。

ふたりの男が管理室の扉へと殺到する。動けない久保田の汗が額をつたって地面へと落ちた。

男は顔を斜めにしてほくそ笑むと、

「久しぶりに、処刑ごっこ」が楽しめそうだ。ほら、逃げてみるよ」

管理所に明かりがともった。和久井の短い悲鳴が聞こえた。やがて突入した男の片割れが出てくると、

「いたのはひとりだけ、しかも女だ」

と怒鳴った。それに対してリーダー格の男は顔をしかめて叱咤した。

「大きな声を出すな」

自分が最初に撃った銃声のことは柵に上げている。

久保田は動くに動けず、じつと相手の隙をうかがうしかなかった。そんな久保田に男は銃の筒先を揺らし、
「早く逃げなよ。任務とはいえ、俺たちも少しは楽しみたいからさあ」

「楽しみだと？」

「だから処刑ごっこ。判りやすくいうと〈狩り〉だよ。ずっと地下にいますとストレスがたまっちゃってね」

「……………」

「長野から呼び出されてこのかた、ずーっと太陽を拝んでなかったし——といつてもすつかり陽が暮れたけどな。お前たちに打撃を与えるとということで、ようやっと、まさきつつあんの外出許可が下りたんだ」

（まさきつつあん——真佐吉のことか）

「そんなことより、早く逃げろよ。逃げ切れたら命が助かるんだからさ。おっと、仲間に連絡しようなんて考えるなよ」

そう言っつて釘を刺すと、男は管理所に目をやった。ふたりの仲間が和久井を連れ出そうとしているところだった。和久井は抵抗をあきらめて、ぐったりとしている。

久保田は激しく後悔した。服を奪った時、いつしよに銃も取り上げていたのだ。だがまさか使うことになるとは思ひもしなかったため、パソコンといっしよにリュックに入れたままだ。

「さあ始めるぞ。五つ数えたら撃つからな。いち」

（一か八か組み付いてやるか？　しかし仲間がいる）

「にーい」

（逃げようにも、この怪我では走るの不可能だ）

「さーん、しーい」

久保田の手が地面をまさぐった。

男は引き金の指に力を入れる。

「ご——」

久保田は素早く身体を反転させると、握りしめた石を相手の顔に投げつけた。男との相撃ちを狙ったのだ。

（当たったか!?)

久保田の回転する視界の中で、相手の男は両腕を上げてのけぞると、音を立てて背中から地面に倒れた。

「おい、どうした！」

男の仲間が和久井助手を放り捨て、胴間声を上げながら駆けてくる。久保田は倒れて動かない男に這い寄った。男の銃を奪えば形勢は少なくとも五分になる。そう踏んだのだ。

だが男に近づいた久保田は仰天した。相手の胸が赤く染まっていたからだ。

(どういうことだ?)

久保田の身体が一瞬強張り、わずかの間があいた。それが久保田に不利に働いた。

ふたりの男は腰から銃を抜いた。

久保田はようやく銃に手が触れたが、とても間に合いません。そうじゃない。

(ここまであつ)

絶望を感じた時、耳のそばでプシュツ、プシュツという圧搾音が鳴った。するとふたりの男が相次いで倒れたのではない。男たちはそのまま起き上がる気配はなかった。

久保田は何が起きたのか理解できなかつた。呆然と目を彷徨さまよわせていると、

「怪我はないか？」

後ろから駆けてきた男に背中を支えられた。迷彩服だった。また別の男がそばを通り過ぎた。彼は銃を持つ

たまま、倒れた三人に近づいて様子をうかがっている。

「足の裏をやられたな。少し砂になってるが、かすり傷だ。もう止まってるよ」

「ああ……ありがとう」

久保田は正体を悟られないよう、顔をそらした。

点検を終えた迷彩服はこちらを向くと顔を左右に振った。どうやら死んでいるらしい。銃を腰に戻すと、管理所の横で腰を抜かしている和久井助手のほうへと近づいていった。

「もしかしてあの管理所にいたの、アンタか？ さつき車でその道を通ったんだが、戻ってきてよかった」

「どうして——」

「ん？ 知らないのか？ 管理所の建物は不法侵入者に対して、屋根の先端に取り付けられたライトが点灯する仕組みになってる」

「へ……」

「くせ者が忍び込んだと睨んで、こっそり戻ってきたんだよ」

久保田は背中を叩かれて、やっと現実に取り戻された。屋根の上を見上げると、確かに小さな緑のライトがともっている。久保田は改めてため息をついた。

しかし一難さってまた一難、今度は迷彩服に発見されてしまった。この状況をどう切り抜ければいい？ さい

わい同じ服装のため相手は気づいていない。このままだましおおせればいいが――。

倒された三人の身体から、砂が風に乗って舞い上がっていく。

「コイツら、何者だったんだろう」

迷彩服がつぶやく。久保田は敵ながら助けしてくれた男たちに好感を抱いた。

「自分たちのことを、長野防衛隊と名乗っていた」

「ナニ？ 長野？」 迷彩服は虚をつかれたように驚きの声を上げた。「長野防衛隊……清香さんを苦しめた連中か」

久保田はハッと眉を上げて、初めて相手の顔をしげしげと見た。

「アンタとは、どこかで会ったか？」

「ン？……まあ俺って知る人ぞ知る存在だから――」

「違う。和歌山のホテルで」

「和歌山？ ……ああ！ アンタあの時の板前さんじゃないか！」

「揣摩太郎——さんだったよな？」

揣摩は頷くと、女性ファンなら失神しそうな満面の笑みを浮かべた。

「そうか、アンタは萌黄さんらを車に乗せて、奈良に向かったんだったよね」

「いやあ、こんなところで会えるとは」そう言ってから久保田は声を落とした。「あちらの人は？」と和久井を抱き起こしている迷彩服を指さした。

「マネージャーの柳瀬^{やなせ}。俺は心のバランスを崩してしまい、彼といっしょに和歌山に残ったんだ。でも」揣摩は頭を掻いた。「ずっと萌黄さんたちのことが気になっていた。だから迷彩服が隊員の追加募集をしていることを知って、彼とふたりで入隊したんだ。もともと俺は体力も体術も自信があつたし、柳瀬はヒーロー特撮物の出演がらみで、本物の銃の扱いに長けてたしね」

久保田はもう一度、長野防衛隊の男たちの亡骸^{なきがら}を見た。百発百中である。まさに久保田にとって彼らは命の恩人だった。

柳瀬は和久井をお嬢さんだっこして帰ってくると、「タロちゃん、このかた無事よ、怪我してないワ」

久保田はあらためて柳瀬に礼を述べ、互いの無事を歡び合った。

「ところで久保田さん」揣摩は言葉を改めて話しかけた。「萌黄さんやむんさんはどこに？ それに久保田さんはここで何してるの？」

久保田はこれまでの話を語って聞かせた。

揣摩は萌黄が地下に連れ去られ、むんが迷彩服側に拉致されたことを知ると顔色を変えた。

「助けないと！ そのために俺はやってきたんだ！」揣摩は両拳を握りしめた。「しかし——地下に降りる階段は、すべてリアルキラーズに押さえられ、見張られている。俺と柳瀬は通れるとしても、アンタたちは無理だ。出入りは嚴重にチェックされてるからね」

一同は腕を組んで考え込んだ。

「あそこはどうかな？」

久保田は排気筒を指さした。揣摩はポンと手を叩き、「——なるほど、長野の連中が出てきた秘密の通路か。

あれならかなりのところまで行けるかも知れない」

むんのことは気にはかかるが、現状ではW I B Aの外に出るのは無理だった。

「よし、第一目標は、萌黄さんの救出だ。アンタたちがいてくれるんで勇氣百倍だよ」

久保田は高らかに宣言した。

「でも、その足で歩けますか？」

揣摩が気遣った。久保田は立ち上がってみせた。痛みは走るが、そんなことを言ってる場合ではない。

「いざとなれば逆立ちしてでも進むさ」

四人は揃って、排気筒から突入することを決めた。一番気合いが入っているのは、柳瀬忠夫三十八歳だった。

「いよいよ敵のアジトに潜入するのネ。血湧き肉踊るワ。待ってる、シヨツカー!!」

氣勢が全員に伝わり——和久井助手でさえ、まなじりを決して——いざ、排気筒に登ろうとした時、

「スマン、忘れ物だ！」

久保田が手を挙げて制止を求めた。

「すぐに戻る」

頭を下げつつ、久保田はトイレに駆け込んだ。

8

弾力性のあるベッドの上で、むんは頭痛が引くのを根気よく待っていた。服装は昨日から着の身着のままだ。

カーテンの隙間に照明のともったWIBAが見える。夕方から急激に広がった叢雲むらぐもをバツクに、波が出てきた湖上に立つ偉容は、それ自体が冷たい意思をはらんだロボットのようには思えた。

ドアがノックされた。むんが返事をすると、細く開いた扉から伊里江真佐夫の顔が覗いた。

「……お目醒めですか？ よかったら会議に参加してくださいませんか？」

むんは判つたと応えた。

ここは海岸近くのとある一軒家。むんたちはまたも空き家のひとつに潜り込んだのだった。

数分後、身支度を整えて階下に降りると、応接間では

雛田、五十嵐、伊里江、駿河炎、炎の母が顔を揃えていた。

「顔色がすぐれないわよ。無理しないでね」

炎の母親がむんを気遣った。むんは大丈夫ですと言い、空いているソファに腰を降ろした。

母親は立ち上がり、キッチンでお茶を入れると、むんの前のテーブルに置いた。むんは軽く頭を下げた。

数分前まで応接間では議論が渦巻いていた。二階にいたむんは、議論が収まるまでじっと待っていた。内容はベッドにいても聞こえていた。WIBAへどうやって乗り込むかが話し合われていたのだ。

今は全員が押し黙っている。一応の結論は出たようだ。雛田が固い空気を打ち払うように、やわらかな口調で訊ねた。

「むんさん。体調はいかがですか？」

「ええ、もうすっかり」

そうは言ったが、頭の中ではまだ半鐘が鳴っていた。柩にむりやり注射された薬品の後遺症である。

再び沈黙がおりる。むんは目の前に置かれた湯のみに手を伸ばした。濃い緑茶が乾いた神経の隅々にしみ渡り、半鐘の響きが徐々に遠ざかっていった。

男たちに目を走らせる。

伊里江は見た目にも判るほど憔悴しょうすいしていた。椅子に腰

かけているのもやっどではないか。

雛田は手の平をこすりながら俯うつむいている。

五十嵐は腕組みをし、顔を天井に向けたまま超然と目を閉じている。

「……むんさん」呼びに行った責任を感じてか、伊里江が重たげな口を無理に開いた。「……我々はひとつの結論に達しました」

むんは腰を動かして居ずまいを正した。

「……正面突破を試みます」
すつと頭から痛みが消えた。むんは伊里江の鉛色の頬をじつと見つめた。

「……私には皆をWIBAまで連れて行く体力は残っていません。空気の球を作ったところで、水に潜るまでもなく壊れてしまうでしょう」

伊里江はふうと息を吐くと、苦しそうに続けた。

「……炎君が超音波で倒せるのは、せいぜい半径十数メートルの敵です。武装した数百人の迷彩服が相手ではどうにも——」

「だからまかせなさいと言うておる」

鋭い声を発したのは五十嵐だった。彼は腕を解くと一同を見渡し、ソファに立て掛けたサーベルに手を伸ばした。

「君たちは加勢せずともよい。私が単身、先陣を切る。」

いや、すべての敵を引き受ける」

「そんな無茶な」むんはソファを立ち、五十嵐の膝をつかんだ。「迷彩服たちの思う壺ですよ！」

むんの脳裏に、WIBA記念館での忌まわしい光景がよみがえった。

「お嬢さん」五十嵐は静かな口調で遮ると、むんの手に自分の手を重ねた。「考えに考えた末の作戦だ。敵もまさか正面から攻めてくるとは想像もせんだらう。そこが付け目だ」

五十嵐はヒゲをわずかに上げて笑うと、話はこれで終わりとはばかり、「よっこらせ」と立ち上がった。

「年寄りには夜が早い。先に休ませてもらいますよ」
五十嵐はサーベルを持って退室した。

むんは唇を噛んで、その背中を見送った。

「明日、日の出前に決行だ」

雛田が宣言した。

と、その時、

《やるのかい？》

くぐもった声が、むんのポケットから流れ出た。むんは驚いて携帯電話を取り出した。液晶画面にウロコが映っている。

「アンタ、いつからそこにいてたん!？」

《ついさっき、たどりついたところさ》

ギドゥラは煙と金箔をまき散らして登場すると、派手にバク転をしてみせた。

「萌黄のところに行ったんでしょ？ あのコは無事？」

《萌黄さんはね、W I B Aに乗り込んだのはいいけれど、捕まっちゃったんだ》

ギドゥラは皆にこれまでにあったことを説明した。W I B Aにたどり着いた途端、萌黄はむんの危急を知り、空を飛んで駆けつけ、久保田と和久井を助け出したこと。ふたりを連れてW I B Aの真ん中に戻り、ビルの外壁に投影された真佐吉の姿に翻弄されたこと。真佐吉のアジトは地下にあるとみて向かおうとしたものの、利根崎の強襲を受け、柘と対決したこと。直後に現れた男たちによつて地下に連れ去られたこと――。

「W I B Aの地下に……」

《エレベーターが地下五階を過ぎたところで、通信状態が悪くなったんだ。それでボクは萌黄さんの携帯を飛び出したんだ。自分のコピーを残してね》

「……………」

《ネット衛星と接続できないと、状況に応じてボクの必要なモジュールをダウンロードできないから。コピーのままだと、かなりバカになっちゃうけど、いないよりマシでしょ？》

むんはもう聞いていなかった。

「ちよつとゴメンな」

ひと言断ると、携帯を操作し、WIBAの地図を表示させた。しかし水面下のデータは五階までしか存在しなかった。

「清香ちゃんは？」

雛田がギドラを睨むようにして訊ねる。

《うーん、判んない》

雛田はがっかりと肩を落とした。

《それとね、これは別の話だけど、利根崎っていう迷彩服さんが衝撃の事実を告白したよ》

「何？」とむん。

《最後のリアルな正体。なんと野宮助教授だって》

「ウソッ」

《まあ、ウソかマコトか》

むんは雛田と顔を見合わせた。

《もうひとつ。ハジメさんは迷彩服側の手に落ちたらしいよ。利根崎にかなりいじめられたらしい》

部屋の空気がどんよりと重くなった。

「……みんなバラバラですね」

伊里江は首を持ち上げると、悔しそうに歯齧はがみした。

それでも、ギドラがもたらした情報は、むんたちにW

I B A 攻略の方針を立てるヒントになった。

彼らはその夜、遅くまで作戦会議を続けた。

「シュウ、いるか？ シュウ・クワン・リー！」
フルネームを呼ばれてシュウは我に返った。

声の主は作戦室の入口で手を挙げていた。シュウは五分刈りの白髪頭を認めると、拳を額に当てて嘆息した。疲れた時にあまり話したくない相手だった。

「シュウよ、隊長の様子はどうか。まだ応援の要請は来ないのか？」

大声が大股の足取りで近づいてくる。

曾我部マサル。見た目は老けているがシュウより三つ四つ若い。彼は真崎のもと、シュウと競う形で世界各地を転戦してきた傭兵仲間だ。雑多に集められたリアルキラーズの中でも数少ない同志である。このリアルキラーズ編成にしても、真っ先に馳せ参じた真崎信奉者のひとりでもある。もちろん傭兵としての腕は一流だ。だが、シュウはこの男があまり好きではない。

「デカイ声でしゃべるな。頭に響く」

シュウはうんざりした声で返したが、曾我部は気にする様子もなく近づいてきた。

「よう、隊長だよ隊長」

「隊長代理だ」

「チツ、どつちでもいいじゃないか」曾我部は机の上に両肘をつくくと、シュウにその暑苦しい顔を寄せた。「なあ、どうなんだ？」

曾我部はここ数日抱いていた危惧をシュウにぶつけていた。真崎がいつもの真崎らしくないというのだ。シュウもその意見には賛成せざるを得なかった。

ひと言で言うと、なま温さが目立つのだ。

シュウのよく知る真崎なら、リアルなど発見次第、ただちにその命を奪っていただろう。リアル抹殺を標榜して集まった集団である。そうでなくては意味がない。しかしながら、京都工大では元の世界に送り返すという大学側の意向に唯々諾々と従った。

リアルは正面からの攻撃を跳ね返すことはできるが、予想不可能な攻撃には身を守ることができない。だから、闘う術を知らない一般人の彼らを抹殺する機会はいくらでもあったはずだ。

曾我部はそこを疑問視している。

「俺の知ってる真崎さんは、あんな人じゃない。俺は今の真崎さんの腹の内が理解できんだ。大学で一気に殲滅しておけば、味方を失わずに済んだのに」

WIBA記念館で起きたリアルクリアーズ全滅事件。犯人はたったひとりの老人だった。あの事件が自分たちに与えた影響は大きい。真崎のやり方に不満を持ち、袂たもとを

分かった仲間もいるほどだ。

数時間前、目と鼻の先の小学校で若い隊員数名が倒れているのが発見された。聞けば利根崎にそそのかされ、別行動をとっていたという。さらに利根崎はリアルである格と手を結び、リアルの五十嵐や伊里江真佐夫を虜にしていたというのだ。事を聞くに及んで、シュウは我が耳を疑った。

(リアルキラーズは崩壊した)

カリスマと仰がれたリーダーが迷走しているようでは、所期の目的を成し遂げることは到底不可能。

そんな思いが頂点に達し、副長クラスが真崎に詰め寄ったのはその直後のことだった。

真崎は熟考の末、お前たちの言い分はもつともだと、意外なほど素直に自らの至らなさを謝罪した。

「野宮助教授の作戦が万が一失敗に終われば、その時こそ我々の出番だ。真佐吉がいると思われる中枢に向けて、一気に殴り込め！」

その言葉は、シュウの胸のつかえを取り除いた。曾我部もその時は納得の表情を浮かべた。

ところが、である。野宮の作戦が文字どおり水泡に帰したことで、自動的に地下侵攻作戦が発動するや、シュウも曾我部も作戦から外されてしまったのだ。

「W I B A の内部だけに照準を合わせるのは危険だ。ま

だ外にいるリアルは真佐吉の転送装置を狙って、WIB
A包囲網を突破しようとして試みるに違いない。我々の地下
侵攻が彼らに邪魔されぬよう、お前たちは外壕そとぼりを見張る
んだ」

そう言い残すと、真崎隊長代理は陣頭に立って、地下
へと階段を降りていった。

当然、曾我部は不満をあらわにした。

伊里江真佐吉の首には莫大な懸賞金がかかっている。

真崎は作戦が成功したあかつきには、それを等分に分け
ることを約束している。だが曾我部は功名心の塊のよう
な男だ。かつて一度、彼はあるオペレーションの中で独
断専行し、真崎やシュウを危地に追い込んだことがある。
真佐吉をその手で挙げれば、傭兵としての値打ちは真
崎を超える。曾我部はそう信じているようだ。

真崎がそんな曾我部を外したのは判らないでもない。
シュウまでも後方に置いたのは、バランスをとるためだ
ろう。シュウは長年の同志でもある真崎の心中をそう理
解した。

しかし、曾我部である。

彼は真崎に対して過剰に心酔するあまり、面と向かつ
て意見を述べることができない。少々屈折した性格の持
ち主なのだった。

「まだ言ってこないか？ 俺抜きじゃやっぱり無理なん

じゃないか？ 一度連絡をとってくれよ」

「何度も鬱陶しい奴だな。いい加減にしないと、持ち場を離れたことを報告するぞ」

曾我部は肩をすくめると、シユウの背後に目をやった。シユウもぐるりと椅子を回す。

ホワイトボードに並んだ札には、リアルの名前がひとりひとり書かれている。『光嶋萌黄』だけが離されているのは、現時点で確実にW I B Aにいるからだ。

そして『小田切ハジメ』。彼は野宮の遺産であるプラズマ放射装置によつて、動けないまま幽閉されている。

「俺の部下を皆殺しにした五十嵐つて年寄りはまだ外にいるんだな。コイツだけは俺がこの手で仕留めてやる」

曾我部はそう言つて唇をねじ曲げた。

シユウは顔を背けた。シユウが曾我部を生理的に嫌う理由は、彼の嗜虐性だ。

曾我部の闘いかたの特徴は、必要以上に残酷なことだった。この二十一世紀の時代に、まるで未開の民族がするように、相手の身体の一部を勝利の印として持ち帰るのだ。その顕著な例が、先週の東北での対リアル戦だ。彼は自ら立てた作戦でリアルを窮地に追い込み、自爆させた。曾我部はその青年の指を土産とし、シユウたちの前で自慢げに披露した。

曾我部はナイフの達人だが、精神的に相手を追いつめ

ることを無上の歓びとする。

シユウはそんな男と同じ空気を吸っていることに耐えられなくなり、

「用もないのにこちらから連絡できるか。何か動きがあればすぐに教えてやる。だから早く持ち場に戻れ」

「あいあい。邪魔したな」

曾我部は粘っこい一瞥を残して帰っていった。

シユウは空気を入れ替えようと、立っていつて換気扇のスイッチを入れた。その目が『光嶋萌黄』の札を捉えた。

彼はホワイトボードに近寄ると、札の文字を指でなぞった。

（いやいや、思い出してみれば、妙な娘だったな。引っ込み思案なようできて、人と溶け込む術を心得ている。突っ張ってるかと思うと、自分を責めて落ち込む。まるでサイコロのように表情が変化したつけ——。なんとか彼女だけでも、元の世界に送り返してやりたいもんだ）

10

へ……ただいま回線が大変混み合っております。しばらく経ってから、もう一度おかけ直し——

五十嵐は公衆電話の受話器を置いた。かけた先は孫の

寛之が入院している病院だ。左右反対に配置されたプッシュボタンは押しにくかったが、なんとか使えた。

五十嵐の記憶では今日明日あたりが手術の日だ。その日は必ず立ち会うと約束したのにどうやら果たせそうにない。五十嵐はせめて電話で力づけようと思ったのだが、十分おきに三度かけても同じメッセージが返ってくるだけだった。

五十嵐は公衆電話を後にした。今となってはクラシックな設備だが、二〇一四年の今日でもなくなっただけな気がした。逆にP A Iを嫌って携帯電話を持たないという人々の微増により、かろうじて命脈を保っているようだ。

午前四時。

街はまだ暗い空の下で静かに眠っている。

通りの向こうにW I B Aが浮かんでいた。

五十嵐は襟を正すと、ゆっくりと歩き出した。着ている背広は昨夜無断で世話になった家にあつたものを、やはり無断で借用したものだ。

(男・五十嵐寛寿郎、いざ行かん――)

その時である。

「あのオ、すいませェん、『おっかけリアルTV』です。二十四時間生放送中の」

マイクを持った男が突然五十嵐の前に飛び出してきた。大型ビデオカメラを肩に乗せた男と、長いマイクスタンド

ドを捧げた女性を従えている。

「失礼ですが、あなたは『將軍』ではありませんか？」

レポーターと思しき男はおほマイクを五十嵐に突きつけた。
「そう呼ばれたこともある」

五十嵐はマスコミの出現に動じることなく応えた。

「で、將軍。あなたはリアルなのですか？」

五十嵐はレポーターのストレートな問にも、おうよう鷹揚に頷いた。

「いかにも、私はリアルである」

相手は「やっと出会えた」といわんばかりに恍惚とした表情を浮かべた。一億数千万人の中のたった十二人。

「あああ、あなたが本物のリアルですか。いやあく初めてお目にかかります。えーっと」

五十嵐は、横断歩道を渡り始めた。そのすぐ先にW I B Aと陸地を繋げている栈橋がある。

「お待ちください、閣下！」TVクルーが執拗に追ってくる。「あなたはなぜW I B Aに行かれるのですか？」

「大事な人を守るためだ」

「大事な人とは？」

「寛之」

「ひろゆき……さん？ ワツ！」

レポーターは後ろからやってきた集団に突き飛ばされた。集団は五十嵐の前にまわると、地面に膝をついて、

口々に「閣下！」と叫んだ。

「おお、これはこれは、君たちか」

彼らは五十嵐を慕って東京からついてきた者たちだったのだ。総勢三十人はいるだろうか。コテージ村以後、別行動となつてしまい、五十嵐も彼らの身を案じていた。ひとりの若者が仲間たちを代表して進み出た。亡くなった信太に次いで副リーダー格だった中村という若者だ。感激のあまり、目を真っ赤に腫らしている。

「我々はここに来ればきつと閣下と再会できると信じていました。どうか我々をW I B Aへのお供にお加えください」

お願いしますと仲間たちは一斉に頭を下げた。

五十嵐は困惑した。だが中村は先回りして、

「W I B Aではリアルキラーズが虎視眈々と牙を研いで、閣下の来訪を待ち構えているでしょう。どうか護衛役を我々に。一同すでに覚悟と準備はできております」

できてますと復唱した一団は、手に手に持った銃や手榴弾を空に向かって突き上げた。

《カゲヒナタさーん、本番一分前ですよおーー!!》

「なにイー、まだ台本ももらってないのに——」

雛田は控え室を飛び出そうとしたところで夢から醒めた。その途端、アゴから床に落下し、グエツとカエルの

潰れたような悲鳴を上げた。

《起きたか、ヒナタ。大変だ!》

机の上でカバ松が騒いでいた。

「このバカカバ、人を起こすのに毎回引っかけるヤツがあるか」

《引っかかるお前が悪い。そんなことよりこれを見ろ》

カバ松は身を引き、テレビ映像を前に出した。そこには、大勢の人間が地べたに座って土下座している様子が映っていた。

「何だよコレ。新興宗教の紹介か？」

《バカたれ、ココ見ろ、ココ》

カバ松が短い前足で画面を叩いた。雛田は携帯を目の高さに持ち上げた。土下座グループの先頭で拝まれている人物に見覚えがあった。

「——これ、五十嵐さんか？」

《そうだよ》

「東京にいた時の集会だろ？」

《まだ寝ぼけてやがんのか？　これは録画じゃない、生中継だ》

雛田は絶句した。部屋を見回すと、すぐ横のソファには伊里江が眠い目をこすっている。その奥では、炎親子がまだ夢の中だ。

「起きろ、みんな起きてくれ！」

大声でモーニングコールを叫びながら、雛田は部屋の隅の大型テレビのスイッチを入れた。たちまち五十嵐の姿が大写しになった。

「どういうことだよ。五時半の夜明けを期して、全員であの棧橋を渡ろうと決めたのに、ジイさん、ひとりで出かけちゃったってのか」

《そのようだな。おそらくひとりで攻め入るつもりなんだろう》

「それじゃ、作戦もへったくれもないじゃないか。またココがどうにかなっちまったんじゃないか」

雛田は苛立たしげに自分の頭を指さした。そして部屋を出ると、二階に向かって大声で呼びかけた。

「むんさん、起きてください。ジイさんが暴走した！」

五十嵐はつい先ほどまで、果たし合いの場に臨む武士の心境でいた。ところが予想もしなかったことに、行方不明だった仲間たちが彼の到着を待っていた。

さらにテレビや新聞などの取材チームだ。彼らも近くで待機していたのだろう、五十嵐の出現を知り、続々と押し寄せてきた。

「ひと言お願いします」女性レポーターが人混みをかき分け、マイクを五十嵐の前に差し出した。「世界中が、あなたがリアルな動きに注目しています。あなたはこ

れからどうなさるおつもりですか？」

五十嵐は周囲の喧噪をよそに、静かな口調で答えた。

「真佐吉を退治します。真佐吉はいわば現代によみがえった“鬼”、そしてWIBAは“鬼が島”であります。私は全力で鬼退治をおこない、彼奴めきやつの野望を打ち砕き、世界に平和と秩序を取り戻します」

それは視聴者に向けてではなく、可愛い孫に向かっての宣言だった。寛之の住むこの世界を守らねばならない。彼を突き動かしているのは、それだけだった。

オオというどよめきが沸き起こった。

「すると五十嵐さんは“桃太郎”なんですね！ さしずめここに集まったお仲間、犬、猿、雉きじでしょうか！」

女性レポーターは、自分の言い回しが気に入ったのか、何度も「桃太郎」を連呼した。すると、どよめきの声は輪をかけて広がり、やがてシュプレヒコールが混じり始めた。

「俺たちは鬼を退治する閣下の犬になるぞ！」

「俺は猿だ！」

「雉だ！」

五十嵐は眉をひそめて、女性レポーターに反論した。

「彼らを動物扱いするな」

そして仲間の前で両腕を広げ、彼らにWIBAに行くことの危険性を訴え、自分についてこないよう説得しよ

うと試みた。

だが、その声はエイエイオーの掛け声にかき消された。群集心理によって昂揚こうようした仲間たちは「鬼を倒せ！」

「宝を奪え！」などと口々に叫びながら、勝手に前進し始めた。神輿みこしのように担がれた五十嵐も、こうなつては観念する他なかった。

栈橋は大型トラックの対面通行にも耐えられるよう設計されている。群衆は今や百人の規模に膨れ上がり、橋の上を威風堂々と進んでいく。

「あつ、誰かいるぞ！」

ひとりが前方を指さした。皆の視線がW I B Aの入口ゲートに注がれた。

迷彩服の男がひとり、たたずんでいる。

曾我部マサルだった。

11

監視カメラに映った人影が五十嵐だと判ると、曾我部は思わず口笛を吹いた。

「向こうから会いにきてくれたぜ。ヒアーツ、ヒアツヒアツヒアツ」

彼は引き笑いを発すると、喜々として待機所を飛び出した。その際ロツカーの中にあつた、ある物をつかんで。

表に出ると、五十嵐の姿は肉眼でも確認できた。曾我部は笑みながら後ろを振り返り、二階の作戦室から出てこようとする隊員たちを制止した。

「お前らア、手を出すなよ」

隊員たちは呆気にとられて曾我部を見おろした。シュウも出てきたが、どういふことだと問う顔をしている。

「あの獲物は俺がいただいた！」

曾我部は同僚にVサインを送った。いつも以上にテンションが高いのは、逸る気持ちを抑えきれないためだ。

（コイツの役立つ時が来た！）

彼は右手に持った長物をグツと握った。

隊員がシュウに訊ねた。

「あの長いのは何ですか？ まさか……」

「そのままかだ」

「えっ、じゃあ本物の——!？」

WIBAの入口ゲートを抜けると、真っ白な栈橋が陸地まで伸びている。五十嵐はすでに橋の中央までやってきていた。

曾我部は栈橋のたもとに仁王立ちして五十嵐を出迎えた。五十嵐らのほうでも曾我部に気づいたらしく歩みが止まった。

「ご老体！」曾我部の声が、夜明け前の海岸に響き渡った。「この橋を渡りたければ、俺を倒してから行け！」曾我部は両手を高々と差し上げた。そして右手に付かんだ鞘を引くと、ぎらりと鈍く光る日本刀の抜き身が現れた。

実況を続けていた女性レポーターが短い悲鳴を上げた。するとそれが引き金となって、先頭を行進していた五十嵐の信奉者たちの隊列が乱れた。ある者は腰を抜かしさえした。

曾我部は鞘を足許に置くと、刀の切先を前に向けた。マスコミ陣は声をひそめた。誰もが立ちすくんでいた。そんな混乱をよそに、五十嵐は歩調を落とさず進む。それを待ち受ける曾我部。

やがて互いのまばたきが見える距離になると、五十嵐は爪先を揃えて立ち止まった。

対峙するふたりを、WIBAのライトが照らしている。曾我部は舌を出して唇をぺろりと舐めると、短く言い放った。

「行くぞっ」

曾我部の身体が前に倒れたと見えた瞬間、ふつとその姿が消えた。五十嵐は左足を後ろに下げ、素早くサーベルの柄を握ると、抜き手も見せずに頭上を一閃した。

キンツ。

刃の触れ合う音が響き、曾我部は五十嵐の背後に着地した。と、振り向きざまに刀を横に払った。これを五十嵐は跳ね返し、ふたりは欄干を背負う形で左右に分かれた。

「ふう」曾我部は息をつき、「外見は老人でもリアルだけのことはある。俺の初太刀を難なくかわすヤツなんざ、この十年、お目にかかったことはない」

曾我部は本心ともからかいともつかない口調で言うと、刀を上段に構え直した。

五十嵐は動かない。

曾我部はじりじりと足を滑らせて間合いをせばめていく。

五十嵐はそんな相手に対してサーベルを降ろすと、

「君の名前は？」と質問した。「私は——」

「五十嵐寛寿郎だろ？ アンタのことは全て調べた」

「ほう」五十嵐はヒゲに手をやった。

「俺の名は曾我部マサルだ。リアルキラーズの第三中隊を率いている」

「曾我部君。私は先を急いでいる。益のない争いはやめようではないか」

「ご老体」曾我部は乾いた唇をひと舐めし、「俺はアンタとこうして相見えるのを楽しみにしてたんだよ。アンタは俺の部下の一個小隊を全滅させてくれた。よもや忘

れたとは言わせんぞ」

「記念館のことを言うとするのか。あれはしかたのないことだった」

「しかたがないじゃ済まん。……まあそれはどうでもいい。俺はリアルキラーズだ。リアルを発見次第、討ち取るのが俺の仕事だ」

「敵を間違えておるぞ。討ち取るべきは伊里江真佐吉だ。人類の敵ともいうべき真佐吉退治に、同じ日本人同士、協力せんか？」

「そうだそうだという声が五十嵐信奉者のあいだから巻き起こった。テレビカメラはその様子を含めて、両者の戦いを撮り続けている。曾我部はチラツと見て、

「マスコミと結託したか。全国に中継して俺たちを悪者に仕立て上げようという腹か？ 姑息な手段を使ってくるじゃないか。伊達に歳は食ってないようだ」

「構うな。この人たちは無関係だ。WIBAに渡るのは私ひとりでいい。どうか通してくれんかな」

五十嵐は言葉尻を和らげて話しかけた。闘う意志のないことを伝えたかったのだ。

しかし相手は耳を貸さず、さらに間合いを詰めてくる。五十嵐は首を左右に振ると、サーベルを握りしめたまま、WIBAへと歩き出した。

「待てっ」

曾我部は五十嵐を呼び止め、同時に身体を横に滑らせ、あらぬ方向に刀を走らせた。

ぎゃつと悲鳴が上がった。

斬られたのは信奉者のひとりだった。首筋から赤い砂を噴き上げて仲間の腕の中にどうつと倒れた。

五十嵐は血相を変えて駆け戻った。

「貴様っ！」

空気が一瞬にして緊迫した。

曾我部は刀に付着した砂を無造作に払うと、待つてましたとばかり、正面から刀を振り下ろした。

避けようとして五十嵐はバランスを崩した。だが倒れながらもサーベルで曾我部の足を払った。

「うっ」

左腕に激痛が走る。橋の上にナイフが突き立った。右腕から血が飛び散る。寸でのところでかすめたようだ。傷の深さを確認する余裕はない。

軽々と宙に飛んで五十嵐の太刀をかわした曾我部は、着地するやすぐに殺到してくる。

五十嵐は、シャアツと掛け声もろとも、左手一本で曾我部の胴斬りを狙った。

「おおっ」

誰もが勝負あったと思った。しかし僅かの差で曾我部は身体を反らせ、鋭い切先をかわしていた。

曾我部にとっては間一髪だった。体勢を整えた彼の胸は横真一文字に切り裂かれ、肌があらわになっていた。

息詰まる死闘だった。

見つめる五十嵐の仲間たちやマスコミ陣、そして対岸で遠巻きにしている迷彩服たちも、声を出せないまま、成り行きを見守っていた。

《なんてこった。イガカンのジイさん、迷彩服とサシで闘ってるぞ》

カバ松が報告すると、雛田は目が飛び出さんばかりに驚いた。

「な、なんでサシなんだ？」

《よく見えん。もちつと右に寄ってくれ》

雛田は背伸びしたまま、携帯を持つ手を人垣の低いほうへとズラした。頭の上から《もつと右、いやチョイ左だ。フラフラするなよ、酔うじゃないか》とエラそうな指図が落ちてくる。

雛田は頑張って腕を伸ばし続ける。そんな彼の肩を後ろからむんが叩いた。

「無理せんでも、携帯テレビに映ってんで」

「えっ」

雛田の足がもつれて、携帯もろとも路上にデンとひっくり返った。

(この男、かなりの手練だ^{てだれ})

五十嵐は、相手の迷彩服の技をそう評価した。決して見くびってはいなかった。昔とった杵柄^{きねづか}で、剣道五段の腕にリアルな能力が重なれば、たやすく撃退できると考えていたことは否定できない。

「やってくれるな」曾我部は唇を舐めた。この男の癖らしい。「さあ来いよ。もつと楽しませてくれ」

《ほう——早朝から剣術の稽古ですか。精が出ますな》
ふいに拡声器の音が割って入った。

張りつめた空気が一転、W I B Aのビル街に引きずられた。

「目だ！」

誰かが叫んだ。全員の目がW I B Aに向く。

入口ゲートの左右に二本のポールが立てられてあり、五メートルほどの高さに大型液晶掲示板が設置されている。いまそのふたつの画面に灯が入り、巨大な目が各々ひとつずつ、画面一杯のサイズで表示されていた。

拡声器から流れた声の主は、まぎれもなく真佐吉だったことからして、この目が彼のものであることを疑う者はいなかった。

《どうぞ、遠慮なく続けてくれたまえ》

真佐吉の声は、まるで居間でくつろぎながらテレビ観戦でもしているような、およそ殺伐とした空気にそぐわない、人を食ったものだった。

橋の上の人々も、WIBA側にいるリアルキラーズも、それぞれざわめき立った。

静かなのは、五十嵐と曾我部のふたりだけだった。

《私は五十嵐さんが勝つほうに賭けよう》

人々はさらに騒然とした。

真佐吉はこの勝負を最初から見ていたのだ。

「気にするなよ。足許をすくわれるぞ」

曾我部が余裕ありげに注意すると、

「気にしとらん」

五十嵐も切り返す。

と、曾我部が動いた。

真つ直ぐ五十嵐に向かって接近してくる。

その手からナイフが放たれた。ひとつは真正面から、もうひとつは山なりに放物線を描いて。

五十嵐はひとつめのナイフは難なく叩き落とした。しかし二本目が降ってくることに気をとられた瞬間、曾我部の姿を見失った。

(やられた。卑怯な！)

五十嵐は全神経を動員して、相手の位置をまさぐった。

左斜め前、欄干のたもとに殺気を感じた。急いでサーベルを傾けた瞬間、ライトの照射圏外から放たれたナイフが五十嵐の頬をかすめた。ぶわっと全身に汗が噴き出す。

だがそれが囧だったと知ったとき、五十嵐は脇腹に冷たい衝撃を感じた。

(斬られた！)

それでもサーベルを斜め後方に振り下ろすと、衝撃は五十嵐に致命傷を与える前に飛び去った。

両者は離れた。

五十嵐は脇腹に手をやった。べとついた血が指先に触れた。服の上からでは傷の程度が判らなかったが、五十嵐は傷口から鬨気が抜けていくような気がして、思わず膝をついた。

背後の人々が「ああっ」と叫ぶのが聞こえた。

「これもかわすのか」曾我部は吐き捨てるように言った。彼も肩で息をしている。「つくづくリアルってのは厄介な存在だな」

「閣下、しっかり！」

「將軍、がんばれ！」

突如声援が沸き起こった。足踏みする音が橋を打ち鳴らす。レポーターの熱のこもった実況中継も、より大きな声で聞こえてきた。

「將軍さんよ」曾我部がまた口を開いた。「アンタ、お孫さんに付き添わなくていいのか？」

五十嵐の耳は、何も聞こえなくなった。曾我部の声以外は。

「今日が手術の日なんだってな。よく知ってるだろ？」

「——な、なぜ」

「言ったじゃないか。リアルのことは調べ上げてあるって。五十嵐さん、アンタの素性や略歴、住んでるところに家族構成なんか。お孫さんの名前、寛之君っていったかな。今は東京大田区の川崎総合病院に入院中の」

「孫の名を口にするな！」

五十嵐は怒りに全身の毛を逆立てたが、曾我部は続ける。

「駅で暴漢に襲われ、そのまま入院したら、検査で偶然、難病に冒されていることが判明した。日本でも数人という特殊な病気らしいな。しかも怪我の影響で容態が悪化した。至急、移植手術をおこなう必要がある。寛之君の運が良かったのは、ドナーを求めた数日後に提供者が見つかったこと。運が悪かったのは、手術の予定日が鏡像世界の誕生後だったこと」

「——？」

「まさか気づいてなかったのか？ この世界で手術なんぞすれば、即、命取りだったことを」

五十嵐は脳天に雷が落ちたような衝撃を受け、その場に膝を落とした。

「大田区の病院——」

むんはいつの間にか人垣の最前線にいた。彼女はたいたいま耳聴く聞き止めた言葉を反芻しながら、最前より口角泡を飛ばして実況している女性レポーターのそばに近寄った。

「ねえ、すみません」

「邪魔しないで、いま放送中——アラ、あなた、舞風さんじゃないの!？」

むんと彼女とは、北海道事件の遺族団の記者会見を通じて顔見知りだった。

「ご無沙汰してます。あの、お願いがあるんですが」「わたしにできることなら」

ナイフが嵐のように五十嵐に襲いかかった。

彼は防戦一方だった。孫の寛之のことが頭から離れず、戦いに集中することができなくなっていた。

闘う相手の心をかき乱す——。それが曾我部の真骨頂であることを彼は知らなかった。彼は完全に曾我部の術中にはまってしまっていた。

真佐吉の〈目〉はその様子を静かに見おろしていた。

五十嵐は満身創痍の身体を、気力だけで支えていた。間まが取れば、リアルパワーで癒すことも可能だろうが、集中力を欠く現状では傷の上に傷を重ねるような状況なのだった。

「もう終わりかな」曾我部は唇に這わせた舌を、五十嵐に対してブルブルと振ってみせた。「それなら、とどめを刺してやる」

曾我部は左右の液晶掲示板に目を走らせて、

「真佐吉イー！ 賭けは貴様の負けだア。これで、お前が欲しがっているリアルがひとり欠けることになるな」

「そうはいかへん！」

橋の上から曾我部に待ったをかける声が出た。

むんだった。

彼女はテレビクルーを従えて五十嵐に接近した。むんが五十嵐の肩に手を置くと、五十嵐は顔を上げ、

「お嬢さんか。私はこれまでのようだ。単独行動をして済まなかったな」

むんは首を左右に振り、後ろにいるテレビスタッフにお願いしますと言った。言われた男は、持ってきたモニターテレビを五十嵐の前に置くと、どうぞと言った。

〈視聴者の皆様、私はいま京急川崎駅から歩いて十分のところにあります、川崎総合病院のエントランスに來ています〉

男性レポーターの話に五十嵐は反応した。生気の戻った目が画面に吸い寄せられている。

〈こちらは外科部長の田村先生です〉レポーターは四十四からみの押し出しのいい白衣の男性を紹介した。〈先生、五十嵐寛之君はこちらに入院されていますよね〉

〈ええ〉

外科部長の顔は心なしか青ざめている。

〈今日が寛之君の手術日だとうかがったのですが、手術は予定どおりおこなわれるのでしょうか？〉

〈はい……そのつもりなのですが〉

と言つて、外科部長は病院内にチラと目を走らせた。

〈どうかされましたか？〉

〈……おいでください〉

外科部長は、レポーターを促して正面扉を開いた。カメラはふたりを追つて病院内に入っていく。

「あつ」

雛田が何かに気づいたらしく、むんの背中を叩いた。

「アレ見て。液晶掲示板！」

むんが見上げた掲示板には、真佐吉の目の代わりに、小型モニターと同じ画面が映し出されていた。

レポーターは思い詰めた表情でロビーを進んでいく。
〈映像は申すまでもなく生中継でお送りしております。
先生！〉彼は外科部長にマイクを向けた。外科部長の険しい顔が画面に大寫しになる。

〈寛之君の声を聞くとはできるでしょうか？〉

〈もちろん。彼はいまこの無菌室の中にいます〉

そう言つて扉を開けた。

すると真つ先にカメラが捉えたのは、迷彩服の男たちだった。三人いる。

「ああ？」 「何だアイツら!？」

むんの後ろでブーイングが起こった。清潔な病院と迷彩服はあまりにミスマッチだった。

カメラは迷彩服が制止しようとして伸ばした腕をかくぐり、ガラス張りの壁の中へと急速ズームインした。

そこでは少年がひとり、ぽつねんとベッドに横たわっていた。

「——寛之」

五十嵐がつぶやいた。

〈ご覧下さい。数時間後に移植手術を控えた寛之君です。彼は元気です。元気にその時を待っています〉

最後の言葉は、五十嵐に向けて投げられたもの。むんはそう思った。

〈なのに、この連中はなぜここにいるのでしょうか〉カメラ

ラはパンすると、迷彩服を下から見上げる格好で捉えた。見方によっては悪意のある撮影方法だ。〈彼らはリアルキラーズの隊員たちです。彼らの任務はリアルを抹殺することです。手術を控えた、いたいけな少年にどんな用があるというのでしょうか〉

レポーターはここぞとばかり、声を張り上げる。

迷彩服たちは所在なさげに顔を見合わせるばかりだ。

ここで突然、映像は橋の上に膝をついた五十嵐に切り替わった。

〈こちら、W I B Aの棧橋からの中継映像です〉女性レポーターが話し始める。〈こちらが寛之君のおじいさまです。おじいさまはずっと寛之君の手術のことを案じておられました。しかし彼にはどうしても避けて通れない使命があったのです。なぜならおじいさまは“リアル”だからです〉

むんは目を閉じた。全国のテレビ視聴者はこの中継を観て、どんな思いを抱いてくれるだろうか？

別のカメラが捉えた映像に変わる。曾我部だ。

ヘリアル対リアルキラーズ。これは宿命の対決であります。リアルキラーズはここW I B Aでリアルたちのやってくるのを手ぐすね引いて待ち構えていました。そんな危険な場所におじいさまはあえて来られた。その理由をこう語っておられます。『寛之を守るためだ。真佐吉を

退治して、世界に平和をもたらすと」

拍手が湧き上がった。中村たち信奉者だけではない。テレビスタッフだけでもない。いつの間にか喧噪を聞きつけて桟橋のそばまで集まってきた一般市民がすでに千人近くまで膨れ上がっていたのだ。

橋に乗り切れないそれらの人々が、対岸から津波のように声援を送ってくる。

曾我部は刀を下げると地面に唾を吐いた。そして携帯を取り出すと、短く命令を下した。「撤退だ」。

映像は再び病院に戻った。

携帯を耳にあてている迷彩服が映っている。彼は了解と短く言うと、他の隊員を連れて部屋から退散した。

また拍手が起こる。

画面はレポーターと外科部長に移動した。

「田村先生、最後にもうひとつお教えください。この世界では怪我をすると、身体の砂状化を引き起こします。寛之君の手術は危険なのでは？」

「いえ。全く危険はありません。手術はドナーのかたの骨髓液を移植するだけです。これは注射一本で済むことなのです。わずか二十分で済みます。寛之君は明日にも退院できるでしょう」

万雷の拍手が桟橋を包んだ。リアルへの一般人の認識が百八十度転換した瞬間だった。むんはそう確信した。

入口ゲートの両側に配置された液晶掲示板は、寛之少年に関する一部始終を、途中で切れることなく最後まで映していた。それは真佐吉の意思だった。彼が欲しいのはリアルな身体。リアルが真佐吉に会いたいと思うなら、その障害を取り除くことはもちろん真佐吉の利益につながる。ゆえに真佐吉は、大型画面に寛之少年の横顔を映してみせた。

今や数千人に増えた群衆は、誰もが五十嵐に同情を示していた。これだけの人々で押し寄せれば、あるいはリアルキラーズを圧倒することができるかも知れない。ましてやマスコミも味方につけた。むんは前方に光を見つけた思いがした。

「五十嵐さん、よかったね」

むんは前にまわって、うつむいた老人の手を取った。

パシッ。その手を皺寄った手はねつけた。

「……………?」

五十嵐はまるでロボットのような、ゆったりとした動作で身体を真っ直ぐに起こした。

ライトが照らした瞳が、銀色にきらめいた。

「——ヨクモカワイイマゴヲテニカケヨウトシタナ」

むんは五十嵐の無機質な言葉を最後まで聞くことはできなかつた。突然に風が舞い、五十嵐が煙のように消えたからだ。

彼女はしまったと口走り、かすかに白み始めた空に目を走らせた。

(一線を越えてしもたっ！)

ガハッと息の漏れる音がした。むんの目は栈橋の尽きた場所に吸い寄せられた。

五十嵐と曾我部が重なって見えた。

老人はサーベルを振り下ろした姿勢で止まっている。

曾我部は目を丸く剥き出して、真横を見据えている。

ツツツと視覚がズレた。そこだけハサミで切り取ったように。ズレはさらに広がっていき、曾我部の首はボールのように橋の上に落ちたが、ボールほど弾まなかつた。群衆は凍りついた。

五十嵐によって強引に再開した勝負は、呆気なく決まった。しかしそれは人々の思い描いていたような、感動のエンディングではなかつた。

さらに群衆は数瞬の後、自分たちの思い込みを後悔することになる。なぜなら――。

「五十嵐さん、待って！」

追おうとしたむんを、雛田が抱き止めた。

「もう止められない！」

むんはわななく口を開いたまま、老人の残像を網膜に焼き付けるしかなかった。

五十嵐の動きはもはや人間のものではなかった。シュウの号令一下、発射された銃弾の雨をくぐり、はじき返し、迷彩服を手近な場所にいる者から、そのサーベルの餌食にしていた。

「貸せっ」

シュウは部下から奪ったマシンガンで、自ら仕留めようと狙いをつけた。しかし、あまりの速さに標的の姿がブレて見え、照準を合わせることができない。

そうしているあいだにも、隊員たちは胴を斬られ、腕を断たれて倒れていく。未来都市WIBAの正面ゲートは、真っ赤な砂の飛び散る異空間へと変貌した。

「そうだ、アレを使えば——」

シュウは二階の作戦室へと駆け戻った。

プラズマ放射装置。リアルに対抗する最終兵器。

マシンガンの体裁に改造された装置は、通常のマシンの三倍の重量を持つ。シュウは担ぐようにして持ち上げると、急いで外に出た。

隊員たちの発する重火器の光は、すでに半分に減っていた。全滅は目前だ。

「五十嵐イーーーーッ！ 俺だア、貴様の孫を殺せと命じたのは俺だぞーーーーッ！」

もちろんでたらめである。東京に待機させてある隊員を動かしたのは、曾我部の独断だ。耳にしていれば反対しただろう。あくまでも政府の意向で動いている我々が、卑劣な手段に手を染めることは許されない。少なくとも表立っては。

だが今回のようにテレビ中継で全国放送されてしまえば、それもお終いだ。この世界が今後もしも続くなら、政府は責任を取らざるを得ないだろう。

（続くならだが――）

五十嵐の動きが変化した。こちらへと向きを変えたのがハッキリと判った。シュウはレシーバーに叫んだ。

「全員に告ぐ。発砲を中止せよ！」

ライトが音を立てて砕けた。続いて二番目、三番目と壊され、消えていく。まるで猛獣が接近してくるような戦慄をシュウは覚えた。

（勝負のチャンスは一度だ）

プラズマ銃を構える。

暗視スコープが五十嵐を捕捉した瞬間、シュウは引き金を引いた。

わずかな反動があり、黒い光線が照射された。

（やった――）

手応えを感じた。

彼はスコープから顔を外した。その途端、わけの判ら

ない悪寒が全身を貫いた。降り注ぐ害意。

シュウは空を見た。

覆い被さった雲の下に、黒く浮かんでいるのは――。
ドンツと作戦室のある建物全体が揺れた。

シュウは驚愕した。五十嵐の顔が鼻先にあった。

「天二代ワリテ不義ヲ討ツ――」

つぶやいた口は大きく開き、両目はほとんど飛び出している。肌はどす黒く、髪はほとんど抜け落ちていた。

「リ、リアルパワーの成れの果て……」

シュウはかつて味わったことのない恐怖に全身を絡めとられていた。五十嵐が醜く歪んだ腕でサーベルを振り上げて、身動きすらできなかつた。

身体から力がすうっと抜けていく。

しかし無慈悲にもサーベルはシュウの首筋へと振り下ろされた。

衝撃がシュウを打った。彼は空中に飛ばされ、そのまま地面へと叩きつけられた。

背中の痛みには耐えながら、あわてて首筋をまさぐる。

(まだくつついてる)

シュウはようやく襲ってきた震えに身体をおののかせながら、周囲に五十嵐の姿を探し求めた。

その目に異形の物体、いや生物がのしかかってきた。

彼は幼少の頃、映画で見た恐竜を連想した。

真つ白な首長竜がそこにいた。

首長竜だと思つた理由は、先端に顔らしきものがあつたからだ。そして両アゴは人をくわえている。

悲鳴が^{こだま}弔し、くわえられた人間の手から何かが落ちた。サーベルだった。

シュウは我が目の見ている光景が夢なのか現実なのか判らなかつた。幸運にもつながっていた首を巡らせると、棧橋の上は押し合いへし合い、我先に逃げようとする群衆で満ちていた。一番前で腰を抜かしているのは舞風むんか。

首長竜は、散々にもてあそんだ五十嵐を地面に落とすと、WIBAのビル群に吸い込まれるように帰つていった。

辺りは静かになった。それでもシュウは立てずにいた。隊員のひとりが駆け寄ってくる。

「副長、大丈夫ですか？」

「——お前、今の、見たか？」

「ろくろ首ですかい？」

(首?)

シュウは初めて気がついた。

首長竜に胴体がなかつたことに。